十勝農業の今を知り 未来を読み解く

〈総括〉干ばつの影響も豊作基調　生乳生産は前年超え

過去最高3500億なるか JA取扱高に注目

新嵐山（芽室町中美生）からドローンで撮影。十勝らしい畑のパッチワークが広がる

2019年の十勝農業は、干ばつの影響で豆類を中心に一部で生育が伸び悩んだ作物や地域があったが、平均気温、日照時間ともに平年を上回って全体的にはおおむね豊作基調となった。酪農・畜産も堅調に推移。JA取扱高が初めて3500億円を超えるかどうかに注目が集まっている。

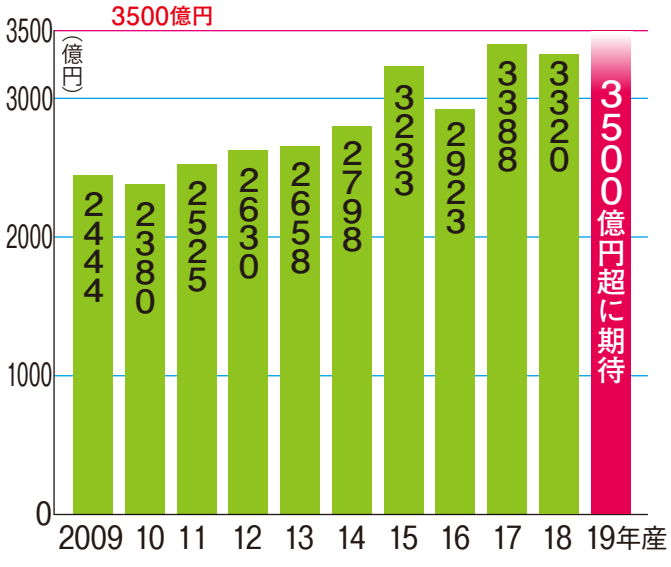
十勝は昨年12月から今年5月にかけて記録的な少雨に見舞われた。帯広測候所によると帯広の12～5月の降水量の合計は平年の半分以下、10ミリ以上のまとまった降水は半年近くなかった。

融雪は3月7日で平年より26日早かった。雪は少ないものの土壌が深くまで凍結し、春作業に入れない畑や地域もあった。雨が少なく耕起の作業スケジュールは順調に進んだが、は種期のカラカラ天気は作物の生育に影響した。特に豆類は、出芽のばらつきや開花期の日照不足、極端な高温も重なり落花が発生した。

秋まき小麦は登熟期間が長く収穫作業も順調に推移し、一部地域を除いて収量・品質の両面で平年作以上。ジャガイモも肥大時期の天候に恵まれるなどで平年以上の収量となった。豆類は、干ばつの影響で生育が遅れ、小豆では登熟のばらつきが見られた。ビートは糖分がやや低いものの収量は平年を上回った。

酪農は夏場の高温で生乳生産が鈍る時期はあったが、乳量は規模拡大などの動きで前年超えが続いている。個体販売は一時の高値は一服したが、比較的堅調に推移した。

JA取扱高は15年に3000億円を突破し、17年に最高額の3388億円を記録した。18年は、心配された天候不順や胆振東部地震による大規模停電（ブラックアウト）の影響は想定より小さく、過去2番目の3320億円となった。19年は前年に比べて畑作が好調なことから、12月下旬の取扱高発表では3500億円突破への期待が高まっている。

（農業TOKACHI取材班）

❖ 十勝24JAの取扱高